口絵・早稲田大学図書館新収貴重書（17）

「死者の書」

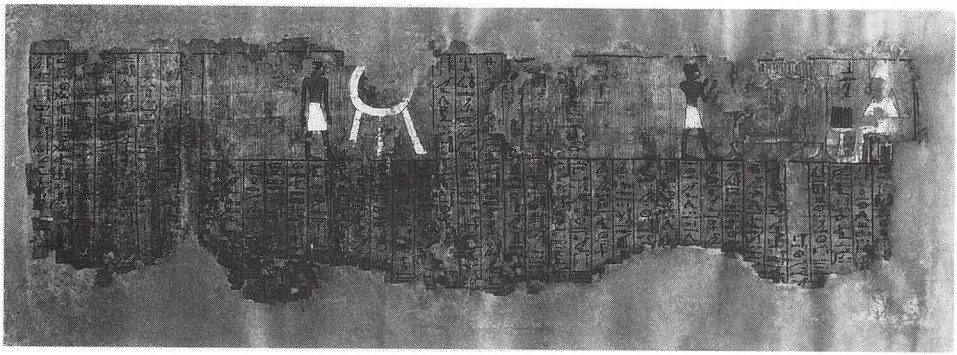
古代エジプトの「死者の書」は、新王国時代（前1550～1069年）直前の時期から前１世紀頃まで見られる葬祭文書で、死者を来世に復活させるための呪文（しばしば「章」と呼ばれる）を集めたものである。これらの呪文は、ミイラを包む包帯、護符などに記される場合もあったが、パピルスに記されて副葬されるのが一般的であった。

本館に所蔵されている「死者の書」はそのようなパピルスの上端部分の一部にあたり、縦書きのテキスト45行の一部と彩色の施された２つの挿絵が残っている。テキストはいくつかの神官文字を含む草書体聖刻文字で筆記されており、「死者の書」によく見られるように、呪文の本文が黒インクで記され、「章」の表題を含む「前書き」と呪文の効能、使用法を記した「後書き」が朱書きされている。またこのテキストは、文字は右向きでありながら、通常とは逆に左から右の行に読み進むという、新王国時代の「死者の書」によく見られる特徴を示している。

まずテキストの（左から）１～８行目には「日のもとに出現し、冥界に入るための呪文」とされる第72章が記されており、その右側には、この章の挿絵として、「死者の書」の中心的な概念である「日のもとに出現する」（太陽と同じく再生し、陽光のもとで生活する）という概念を表わした、光線を放射する太陽の前に立つ死者の姿が描かれている。この挿絵は第72章の挿絵としては他に類例のないものである。死者の姿の左側には、「某」を意味する神官文字が朱書きされており、このパピルスが「既製品」として作られたものの、実際には使用されなかったことがうかがえる。

テキストの９～26行目（９～11行目は後述する挿絵の左側空白部分に書かれている）には「オシリスの法廷にくだるための呪文」第124章が記されており、その右側にはこの章の挿絵として、オシリスを礼拝する死者とオシリスの法廷に関連を持つと考えられる衝立が描かれている。この挿絵もまた、第124章の挿絵としては他に類例がない。

テキストの27～30行目、31～42行目にはそれぞれ、いわゆる「変身呪文」である第83、84章が断片的に記されており、43～45行目はほとんど残っていない。

呪文が書かれている順番、神官文字の特徴、挿絵の人物表現の特徴から、このパピルスは、第18王朝前期、おそらくハトシェプストおよびトトメス３世の治世（前1473～1458年）前後の頃のものと思われる。

（明倫短期大学助教授　内田杉彦）